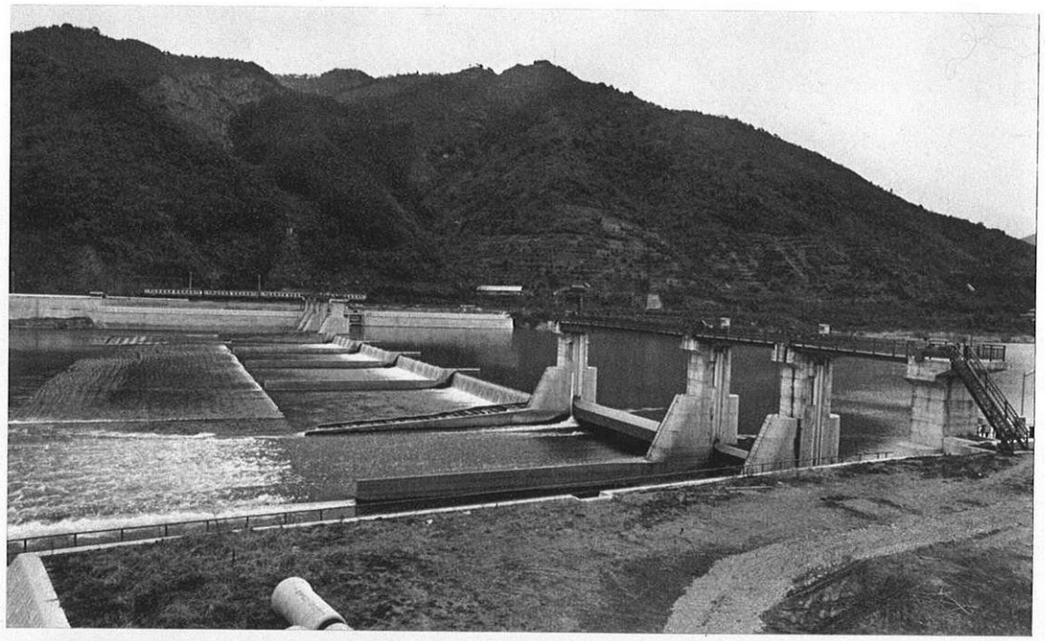


八代平野の土地改良事業と共同で建設した球磨川の新遙拝堰は、工業用水の取水点として臨海工業用地への給水にも大きな役割を果たしている。

内陸型の工業団地造成も着々と進んでいる。熊本市近郊に出来た鉄工団地

＜ここに人あり＞

肥後チャボ保存への熱意

★熊本市花園町
飼育　根占正嘉さん

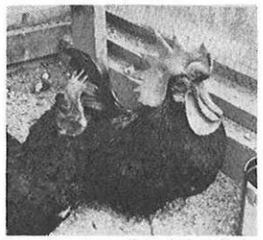
根占正嘉（ねじめまさよし）さん（四八）＝熊本農校教諭

チャボ飼育歴二十年。こと肥後チャボの話になると、温和なまなざしが、眼鏡ごしに熱っぽく輝いてくる。

小型ながら武将の風格

チャボがわが国に渡来したのは、徳川時代の初期。チャボの語源は、原産地の占城（チャンパ）国がなまったものという。現在のベトナムである。

肥後チャボは、昭和十六年に国が天然記念物として指定したチャボ二十五種のうちの一つ。大冠桂（たいかんかつら）と達磨（だるま）の二種がある。



大冠桂は、トサカの先端からあごのタレの下端までが、二十一センチから二十四センチと大きく、小型で足の長さは三センチほどの短脚。両翼の一部と、シッポがまっ黒のほかは全身が白で、さし尾（俗にいう鶴毛が垂直に立っている）が特徴。

達磨は、大冠、小型、短脚で全身黒、尾がチョキ尾（ハサミでチョキンと切ったような格好で極めて短かい）に特色がある。

どちらも小型ながら、胸を張り出した毅然とした姿からは、緋緞（ひおどし）のカブトに身を固めた武将の風格さえ感じさせる。

この大冠系統のチャボが熊本に導入されたのは、明治末から大正の初期。それ以来、長い年月をかけ、愛好家の手によって、現在の熊本独特のものに保存改良されたもので、いわば生きた芸術品ともいえよう。

十余年の執念と夢

「子どもの頃から、とにかく生きものが好きだった。」という根占さんは、戦後、芦北農林高校で教鞭をとるようになって、まず考えたのが、日本独特の伝統を持つ日本鶏の飼育だった。それは敗戦後の心の空白を埋める一つの支えともなった。チャボはもちろん、地頭鶏（じとっこ）（鹿児島・宮崎）、岐阜地鶏（岐阜）、東天紅（高知）、薩摩鶏（鹿児島）など、十五年の間に、天然記念物に指定されている日本鶏十七品種のうち、尾長鶏を除くほかは、一度は根占さんの鶏舎を賑わせたという。

そうした時、日本鶏保存会会長をしていた小穴彪さん（故人）の「一人一品種、それも郷土の鶏の保存に努めるべきだ。」という言葉に、根占さんは大きな示唆を受けた。三十年頃、当時高校一年生だった羽矢国雄さん（三〇）＝花園町＝と知り合ったことも、根占さんが肥後チャボ保存へ、改めて目を向けるキッカケともなった。羽矢さんは、根占さんにまさるとも劣らない程の情熱を肥後チャボにかけていた。二人が肥後チャボの発見のために走り回ってわかったのは、絶滅にひんしているということだった。貴重な文化財を絶やすまいという、執念ともいえる二人の十年来の夢は、その一つの段階として、昨年四月、〃肥後チャボ保存会〃の設立にまでこぎつけたのである。

保存会の呼びかけに、県内はもちろん、福岡や佐賀、そして兵庫県などから、約六十人の会員が集まった。純粋種も桂十五つがい、達磨十つがいを確保することができた。

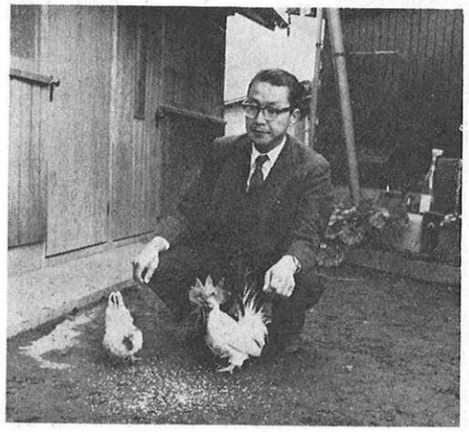
確率三分の一への期待

「一般には、熊本にいるチャボは全て肥後チャボだといった認識不足がありますね。それに若い層に愛好家が欲しいですね。」戦前戦後を通じて、かなり存在していた肥後チャボが、ここ四・五年の間に、めだって激減したのも、若い飼育者がいなかったのに一つの原因があるという。

根占さん自身は、桂と達磨をそれぞれ二つがい持っている。春秋の孵卵期は楽しみでもあり、心配の多い時期でもある。ヒナがかえっても、これはと思えるのは、せいぜい三割どまり。期待をかけているだけに失望も大きい。

とはいっても、三分の一の逸品を作り出す確率へかける期待は大きい。純粋性の追求、それは根占さんの生活を貫く姿勢でもある。

根占さんが勤務の関係で時間がない時は、チャボの面倒は専ら妻のりふさんの役目。四人の息子さんたちが、あまり興味を示さないのが、根占さんには残念らしい。



根占さんを会長とする保存会の目標は、まず純粋種を現在の二倍に増やすこと。会員も百人以上にし、将来は種鶏登録もして、純粋種を会員全員が飼育するまでに持っていき、文化財としての真価を保ちたいという。

さしあたり、機関紙の発行や、春秋二回は即売会をかねた展示会を開いて、一般の肥後チャボへの関心を高めたいと、根占さんは、肥後チャボの普及保存に大きな熱意を傾けているのである。

こういうことは、いっけん無駄な作業のように思われるかもしれない。しかし、純粋保存という大きな価値の存在を自ら証明しようとする根占さんたちの努力は、一つの〃文化〃ともいえるのではなかろうか。